Japanese Association of Educational Psychology

438 教育心理学研究, 2007, 55, 438―450

原著〔実践研究〕

保護者はクライエントから子どもの援助のパートナーへとどのように変容するか

―― 母親の手記の質的分析 ――

田 村 節 子* 石 隈 利 紀**

本研究の目的は，母親がクライエントから子どもの援助のパートナーとなる心理的変容過程のモデルを生成することである。母親が自主的に記録していた手記を分析データとしたが，手記には，子どもが1歳から14歳までに起こった出来事や，その出来事に対する自分の捉え方，スクールカウンセラーとのやりとりや母親の心理的な変化について，ありのままに記述されていた。手記は修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いて分析され，20個の概念から10個のカテゴリーを見出し，10個のカテゴリーはさらに4個の上位カテゴリーにまとめられた。その結果，母親の心理的変容過程はIV期に分かれた。I期において子育てにおける疎外感，無力感，徒労感を抱いていた母親は，II期においてSCとの出会いにより心理的な揺れを伴った軌道修正の過程を経た。この過程を経て母親は，クライエントから子どもの援助のパートナーとして心理的に変容し，III期においてパートナーとして援助チーム会議に参加することで親役割の充実がはかられ，IV期においては母親自身の将来への展望をもつことが示唆された。カウンセリングニーズとコンサルテーションニーズの視点からも考察を加えた。

キーワード： 保護者，チーム援助，カウンセリング，コンサルテーション，学校心理学

問題と目的

近年，我が国では経済状況の悪化や情報化の波など急激な時代の変化に伴い，子どもをめぐる環境が一段と厳しさを増している。そして，不登校，非行，いじめ，ニート，暴力行為など子ども達が抱える問題状況も益々顕在化してきている。このような問題状況を抱える子どもの増加に伴い，保護者もまた大きな悩みを抱えることとなる。一般的に子どもが大きな問題状況を抱えると，親の育て方や生い立ち等にその原因が求められることが多い（大河原, 2004, p.101）。そこで，保護者は相談機関やスクールカウンセラー（以下, SCと略）らに問題解決を求めるが，“聞いてくれるだけで答えは自分で…という感じで何にも変わらない”という保護者の声が聞かれる。中釜（2002, p.62）も，子どものことをカウンセラーに聞いても教えてもらえず，アドバイスもくれないという母親の声を紹介している。このような保護者は，子どもにどのように関わったらいいのか具体的な方策を知りたいというニーズをもっている。

一方，保護者が心身共に疲弊しているのに教師やSCらがそれを受け止めず，“親の苦しさは十分に分かってもらえない”という保護者の声も聞かれる。特に母親は，“子どもの問題を母親のせいにしがちな社会風潮の中で，人知れぬ不安，挫折感，罪悪感や自信喪失感を抱きやすい（渡辺, 2000, p.122）”のである。この場合，保護者は，ひとりの人間として，辛い心情を十分に理解してほしいというニーズをもっている。

これら保護者の心身の疲弊に関する援助ニーズと，子どもの問題状況に関する援助ニーズについては，「カウンセリング」と「コンサルテーション」の2つの視点から検討できる。学校心理学（石隈, 1999）においては，カウンセリングは「教師やカウンセラーなどによる子どもへの直接的援助サービス」，狭義では「カウンセラーあるいはそれに準じる専門家による面接」と定義され，コンサルテーションは，「子どもの理解や援助に関する援助者の課題に対する援助（子どもへの間接的援助）」と定義されている。カウンセリングでは，クライエントの個人的・情緒的な問題に焦点があたるが，コンサルテーションではコンサルティの職業的・役割的な問題に焦点があたる。したがって，この定義によれば，保護者の子どもとの関わりに関して具体的に検討したいというニーズは，コンサルテーションニーズと

* 茨城キリスト教大学文学部
setsuko@tamura-japan.com
** 筑波大学大学院人間総合科学研究科
ishikuma@human.tsukuba.ac.jp

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

言える。一方，保護者が子どもを受け入れることに伴う自分の心情を理解してほしいというニーズは，カウンセリングニーズと言うことができる。子どもへの援助的な関わりについては，田村・石隈（2003）で述べられているように，保護者を援助するという関わりにおいて，保護者はカウンセリングのクライエントとなる。一方，子どもの援助について保護者と一緒に方策を考えていくという関わりにおいては，保護者は援助チームのパートナーとなる。

援助チームは，援助ニーズの大きい子どもを援助するチームであり，学習面，心理・社会面，進路面，健康面における問題状況の解決を目指す複数の専門家と保護者で構成される。さらに“援助チームは学級担任の教師や保護者が子どもに効果的に関わるよう援助する機能をもち，教師や保護者をサポートするチームでもある（石隈, 1999, p.279）”とされている。チーム援助という活動や実践については，八並（2006）のチーム援助研究の展望にもあるように多様な援助チームの研究や実践が行われている。田村・石隈（2003）は，保護者を含む援助チームの連携の形態を分類し実践モデルを提案している。その研究結果によると，保護者はパートナーとして援助を提供する側に位置づけられ，保護者，担任，コーディネーターの3者によるコア援助チームで行われる相互コンサルテーション[1]が有効であったと報告している。

担任やコーディネーターは，初めからコンサルテーションニーズをもち参加しているが，先に述べたように保護者は不安や混乱等から生じるカウンセリングニーズをもちやすい。子どもの苦戦に関わる保護者への援助においては，保護者のカウンセリングニーズを満たすことが，コンサルテーションを進めて，子どもの問題状況をよくするための基盤となる。しかし，来談当初カウンセリングニーズをもつクライエントとしての保護者が，どのようにして子どもの援助のパートナーとして援助チームに参加するのかについて研究したものは，筆者らの知るかぎり見あたらない。

そこで，本研究では保護者が援助者との相互作用において，カウンセリングのクライエントから，子どもの援助のパートナーへとどのように変容するかについて，保護者の心理的変容過程のモデルを生成することを目的とする。具体的には，第1筆者であるSCが援助を行った事例について，保護者の手記をもとに母親の心理的変容に焦点をあてて分析する。

方　法

1．質的研究法の選択

本研究では，母親の手記を分析し，クライエントからパートナーへと変容していく母親の心的過程についてのモデルを生成する目的のため質的研究法を選択した。さらに，質的研究法の中でも，ヒューマンサービスの領域において適性があり，データに密着し分析するグランデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach 以下, GTA と略）を参考にした。GTA とは，ある現象に関して，データに根ざした帰納的に引き出された理論を構築するための，体系化した一連の手順を用いる質的研究の一方法論（Strauss & Corbin, 1990）であり，グレイザー版，ストラウス版，ストラウス・コービン版等がある。本研究では，“修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach）（木下, 1999, 2003, 2005）”（以下, M-GTA と略）を用いた。M-GTA はデータを切片化しないため文脈を大切にすることができ，分析手順も明確で優れた説明力があり，結果の妥当性を高めるように工夫されている。本研究は，クライエントの手記を扱うため文脈を理解することは極めて重要であり，質的研究である本研究の妥当性を高めるために，M-GTA を用いた。しかしながら，結果には研究者の過去の経験や援助サービスに対する捉え方等が反映される。そのバイアスを補うために以下の工夫を行った。①当事者である母親に生成した概念をチェックするという手続きをもうけたこと，②分析するにあたり，本事例の援助者でもある第1筆者の面接の観察記録も参考にしたこと，③第2筆者の評価を得たこと（本研究は，母親の面接を担当した第1筆者と，研究面で協力した第2筆者との共同作業で行った）である。

2．実践現場からのデータ収集

(1) データの入手とその概要

分析対象のデータは，保護者が自主的に記録していた手記である。子どもが生まれた時から14歳までの子

[1] 相互コンサルテーションとは，異なった専門性や役割をもつ者同士が，それぞれの専門性や役割に基づき，子どもの状況について検討し，今後の援助方針について話し合うプロセスのことである（石隈, 1999）。相互コンサルテーションは，コンサルタント（専門性に基づきコンサルテーションを行う人）とコンサルティ（コンサルテーションを受ける人）の援助関係が一方向ではなく両方向であることを強調して，コミュニティ心理学の提唱するコンサルテーション（異なる組織において一方の専門性に基づいた援助を受ける話し合い）（鵜養, 1997 ; 山本, 1986, 2000）とは別に概念化される。ただしコンサルテーションも相互コンサルテーションも異なる専門性や役割をもつ者が協力して問題解決を図ろうとする点においては同じである（田村・石隈, 2003）。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

どもの様子について，母親が折に触れノートに書き留めた約20冊の手記の中から，同じように悩んでいる人や援助者に一番伝えたいと強く思ったことを母親自身が抜き出し，400字詰め原稿用紙25枚分に縮小してSCに手渡したものである。手記には子どもに起こった出来事，それに対する自分の捉え方，SCと面接が始まってからはSCとのやりとりの中味と自分の捉え方，それらに伴う心理的な変化などが記されており，そのデータのすべてを分析の対象とした。なお，この事例には第1筆者自身がSCとして関与しているが，筆者は，実践中母親がこの手記を記録していたことは知らなかった。「自分の体験を他の苦しんでいるご家族に役立ててほしい。」との申し出が母親から筆者にあり，200X年5月（A子，中3）にこの手記の存在を知った。論文掲載にあたっては保護者の了解を得たが，事例が特定できないように配慮した。なお，SCの活動についてのデータをSCの記録から補足的に加えた。

(2) 対象者と実践の場についての記述

①対象者 保護者（40代前半・女）…家業手伝い。夫とA子と兄との4人家族。父親は単身赴任。SCとのカウンセリングおよびコンサルテーションは初めてである。転校前に医師，教師からの言動による傷つき体験あり。当初は，母親の気にしすぎであると言われ子育ての自信を無くしていた。誠実で責任感があり，子どものためには労をいとわない。

・A子（小6〜中3）…小学校時，数回転校を経験。小学校6年生の時，県外より転入。集団になじみにくく，いじめを体験している。A子は，援助過程の中で両親と医療機関を受診し，中学3年生の終わりにアスペルガー障害と診断された。

②実践の場についての記述

公立A小学校 北関東地方都市の市街地中心部に位置している。周辺には社寺や史跡が多い。子どもの自主性や郷土愛を重んじる校風。

公立B中学校 歴史ある学校で周辺には社寺や史跡が多い。校区は広く，市中心部からの通学者の他にバスでの遠距離通学者がいる。生徒会や部活動も活発。

③援助チーム会議の出席者 主に保護者，担任，学年主任，生徒指導係担当教諭，SC。必要に応じて関係機関と連携（A子，小学6年生時，B大学の障害児教育相談室。中学3年生時，発達障害関係のCクリニック）。

④データの記録時期 199X年〜199X＋13年

(3) データ分析の手続き

A子が1歳3ヶ月から中学3年生までの母親の手記を主なデータとした。分析はTABLE 1の手続きで行った。手続きのSTEP 1では，保護者の手記を文脈を損なわないように区切り，分析の最小単位である概念を作成した。STEP 2では，生成した概念を当事者である母親に示し概念を微調整した。これはSTEP 1で得られた概念の妥当性を高めるために行った。STEP 3では，個々の概念の関係からカテゴリーへと統合し，さらにカテゴリー間の関係から上位カテゴリーグループに統合した。STEP 4では，上位カテゴリー間の関係を統合し関係図を作成した。STEP 5では，STEP 4で得られた関係図を当事者である母親に提示し，当事者の体験した心理的変容過程を表しているかどうか関係図の妥当性の評価を得た。

研究過程と結果

TABLE 1の手続きで行った研究過程とその結果について記す。

1．手記の概念化（STEP 1）

STEP 1では，保護者から収集した手記のデータを概念化した。概念化は，手記の文脈を損なわないように文面を意味のまとまりで区切りデータとし，本研究の分析テーマに照らしながら，母親の心理面の記述に着目して概念を生成した。生成された20個の手記の概念とデータの例をTABLE 2に記す。概念は，母親の心情がそのまま伝わるように配慮した。概念化の過程は，得られた概念をより上位のカテゴリーにまとめるための前段階と位置づけられた。

2．母親自身によるチェック（STEP 2）

TABLE 1 データ分析の手続き

STEP	分析	手続き
1	手記の概念化	保護者の手記を文脈や意味のまとまりで区切り，抽象的な概念へまとめる
2	母親自身によるチェック	分析途中結果を母親に提示し，フィードバックされた意見をもとに分析を見直す
3	カテゴリーへの統合	概念からカテゴリーへと統合し，カテゴリーをさらに上位カテゴリーグループにまとめる
4	カテゴリー間の関係	カテゴリー間の関係を検討し，関係図を作成する
5	母親自身による分析結果へのチェックと評価	分析結果を母親に提示し，フィードバックを得ると共に支持されるかどうか妥当性を確認する

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 2　母親の手記の概念化とデータの例 (STEP 1)

	概念名	手記のデータの例
①	ぼんやりとした不安	どうも他の子と違う。きちんと椅子に座って，先生の話，指示にも従える。ただ，遊ぶ時，たいていひとりでいる。お気に入りはひとりで熱中する砂遊び。
②	度重なる登校渋りや不登校という事実との直面	新しい学校に一日登校しただけで，夜泣きながら，学校は辛い，との訴え。「やはり学校はみんな同じ。言葉の矢がいっぱい私の心に突き刺さって，ついに貫通しちゃったんだよ。」
③	不安を打ち消すための必死の努力	下校後，友達と遊ぶ約束もなく，せめてその代わりができればと，親が，図書館や公民館の講座に連れていき，何とか，友達ができればと，奔走していた。でも，いつでも，ひとりでいた。
④	心のバランスをとるための「個性」という納得の仕方	親は心配するが，しっかりしていて，何も心配されなくてよろしいですよ，と教諭は言う。だが，日々のエピソードを聞き，「もしかして，自閉症なのでは？」と問いかけるが，「そんなことはないですよ。」と一笑される。いろいろな個性があるのだな，と自分に言い聞かせていた時期でもあったように思う。
⑤	「母親の気にしすぎ」という教師や医師の無理解	なにしろ，教室ではおとなしく，他の子どもに迷惑をかけることもなく，著しい学習能力の遅れも見られず，態度もきちんとしているのである。親が問題を提起しても，「お母さん，気にしすぎですよ」とまた言われる。「親の気にしすぎ」この言葉をこの１０年間，何度聞いたことだろうか。
⑥	子育てへの非難と深まる疎外感	「母親であるあなたが甘やかしすぎるからこんなことになった。勉強が遅れてしまうだろう，どうするのだ。家の手伝いぐらいさせろ。きちんと大きな声で挨拶をさせろ。親の態度がすべて悪い。みっちりと躾をしなおしてやる。母親は子どもの小間使いのようになって，子どもの言いなりになっている，こんなことでどうする。」
⑦	子どものSOSに翻弄される心	子どもがＳＯＳをだしているのに，無理をさせていいものか，いや，担任の言う通り，とにかく無理やりにでも，連れて行った方がいいのか。「不登校」で検索すると，膨大な量の情報がでてくる。毎晩，眠れない時間を費やして読んでみるが，答えはでない。
⑧	いじめられっぱなしのわが子や自分自身への不甲斐なさと無力感	いじめられないようにするには勉強で頑張るしかないのだよ，などと，今思えば，非常に的外れな助言をしていた。それでも，もう学校では仲間はずれにされたり，無視をされたりと，苦痛以外何物でもなかったことだろう。
⑨	死にたいと思うほどの混乱と徒労感	自分がしっかりしなくては，との思いでいたが，体がすでにまいっていた。首の激痛，うつ状態，通院，投薬，発疹，漢方薬，鍼灸，ペインクリニック。「嫌な時は，楽しい時の事を考えるといいんだよ」子どもにいいながら，自分自身にも言いきかせていたのだと思う。
⑩	スクールカウンセラーとの出会いによる子どもの捉えなおしの開始	カウンセラーのT氏との出会いが，非常に大きな変化をもたらした。様々な情報を提供してくれ，それにより広がっていくいろいろな人との出会いは，少しずつ自分自身の見方，考え方の方向を軌道修正していってくれた。
⑪	子どもを理解し受け入れるための葛藤と抑うつ感	「受け入れる」ただこのひとことができない，でもしなくてはならない。
⑫	スクールカウンセラーへの怒り	SCは常に冷静にきちんと物事を理論的にゆっくりと話してくれる。混乱しているこちらからはその冷静さに嫌悪する。SCには全く落ち度はない，言いがかりである。誰にもぶつけられない苛だちを八つ当たりしていたのだと今は思う。
⑬	子どもの関わり方への新たな疑問と不安	子どもは不登校を続け，一日中ゲームとテレビ，母親である私は何をしたらいいのかわからない。
⑭	逆なでする教師のちょっとしたしぐさ	あいさつをしても顔すら向けず，これみよがしに無視をする。
⑮	取り戻した落ち着きと援助者のひとりとしての相互コンサルテーションへの参加	定期的にスクールカウンセラーと１対１の面接を重ねていくうちに，私の心は冷静さを取り戻し，スクールカウンセラーのコーディネートにより，担任，保護者，スクールカウンセラーによる合同面接，いわゆる「援助チームミーティング」が行われるようになった。
⑯	相互コンサルテーションによる子どもの肯定と好転がもたらした信頼感	「シート」の記入も前回と比べて「よくなったこと」を考えていこうというスクールカウンセラーの話は，物事を肯定的に見ていこうという気持ちが伺え，今日はどんないい話が聞けるか，また，どんないい話をしようかと，楽しい時間でもあった。
⑰	スクールカウンセラーや教師らからのサポートによる疎外感の減少と感謝の念	とはいえ，SCの存在は有り難かった。ＳＣと担任が一緒に家庭訪問し，後に担任が週１回家庭訪問，担任との信頼関係が出来てきたところで，二学期中頃より，週１～２回登校，クラブ又は夕方理科室で担任と30分程過ごせるようになり，三学期からはほぼ毎日午前中のみ，母親と共に学習相談室に登校できるようになる。
⑱	母の会の情報源としての活用	(SCの提案で校内の母の会で)進路指導の話，また，実際にA高校の担当者が来校して説明会を開催してくれたことは，とても良かった。その後の状況が大きく変わった。
⑲	子どもの進路や具体的な方策がもたらす希望	将来が明確に見えないと不安になる，不安は心の不安定さにつながり，気持ちが落ち込んでいく。非常にフレキシブルなカリキュラムで，まさにぴったりの通信制の高校があることの発見は希望の光に見えた
⑳	心の平安と自分の人生の新たな目標の獲得	私は自分でも驚くほど心は穏やかである。「どうしてできないのか」そればかり思っていた日々を思うと，本当にもったいない。(子どもには)将来的には経済的な自立という大きな目標がある。そのために，ジョブコーチというものがあるということを視野にいれ，私自身，勉強を進めていきたいと思っている。

上記で得られた概念が，文脈から意味のまとまりをもって適切に保護者の心理的な過程を表しているかどうかについて，保護者にチェックを依頼した。チェックすることは，母親にとっては過去の振り返りとなり辛い体験となったが，示された概念に対しては，“そう，そう…”と，分析結果は支持された。概念名の一部の語句について母親からフィードバックを得たため，分析の見直しを行い概念の語句および定義の修正を行った。例えば，母親から“‘孤立’は孤立なんですが，自分だけ追いやられていくような感じがあったので‘疎外感’という言葉の方がぴったりきます。”というフィードバックを得て，当初の概念名６“子育てへの非難と深まる孤立”と概念名17“スクールカウンセラーや教師らからのサポートによる孤立感の減少と感謝の念”の中の‘孤立’‘孤立感’という語句を‘疎外感’へと修正した。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 3 カテゴリーへの統合 (STEP 3)

カテゴリー	カテゴリーに含まれる概念
1．適応できないわが子への不安	① ぼんやりとした不安 / ② 度重なる登校渋りや不登校という事実との直面
2．母親だけでの問題解決行動	③ 不安を打ち消すための必死の努力 / ④ 心のバランスをとるための「個性」という納得の仕方
3．専門家の無理解	⑤ 「母親の気にしすぎ」という教師や医師の無理解
4．義父母や教師，医師からの非難	⑥ 子育てへの非難と深まる疎外感
5．疎外感，無力感，徒労感	⑦ 子どものSOSに翻弄される心 / ⑧ いじめられっぱなしのわが子や自分自身への不甲斐なさと無力感 / ⑨ 死にたいと思うほどの混乱と徒労感
6．スクールカウンセラーとの出会いと信頼関係による軌道修正	⑩ スクールカウンセラーとの出会いによる子どもの捉えなおしの開始
7．子どもを受容することに伴う母親の心理的な揺れ	⑪ 子どもを理解し受け入れるための葛藤と抑うつ感 / ⑫ スクールカウンセラーへの怒り / ⑬ 子どもの関わり方への新たな疑問と不安 / ⑭ 逆なでする教師のちょっとしたしぐさ
8．援助チームの中での信頼関係の広まりと深まり	⑮ 取り戻した落ち着きと援助者のひとりとしての相互コンサルテーションへの参加 / ⑯ 相互コンサルテーションによる子どもの肯定と好転がもたらした信頼感 / ⑰ スクールカウンセラーや教師らからのサポートによる疎外感の減少と感謝の念
9．具体的な方策や情報がもたらす希望	⑱ 母の会の情報源としての活用 / ⑲ 子どもの進路や具体的な方策がもたらす希望
10．子どもや母親自身の将来への展望	⑳ 心の平安と自分の人生の新たな目標の獲得

3．カテゴリーへの統合 (STEP 3)

STEP 1，STEP 2で得られた分析結果を踏まえて，カテゴリーへの統合を行った。概念を統合したカテゴリーをTABLE 3に示す。手続きとしては，STEP 1で生成された20個の概念は，STEP 2のチェックを経て修正された。さらに，母親の心理的変容に焦点をあてて概念から10個のカテゴリーへ統合し，さらに統合されたカテゴリーを4個のカテゴリー・グループに統合した。その結果，カテゴリーやカテゴリー・グループは時系列となった。カテゴリー・グループをTABLE 4に記し，以下に説明する。

(1) 子育てにおける疎外感，無力感，徒労感

“1．適応できないわが子への不安”は，母親の心理過程の出発点である。さらに不安を打ち消すための“2．母親だけでの問題解決行動”，そして“3．専門家の無理解”“4．義父母や教師，医師からの非難”により生じた“5．疎外感，無力感，徒労感”は，子どもが1歳から小5までの母親の心情を表すものである。それら5つのカテゴリーを内包するカテゴリー・グループは，“子育てにおける疎外感，無力感，徒労感”というグループとしてまとめた。

(2) 心理的な揺れを伴った軌道修正

“6．スクールカウンセラーとの出会いと信頼関係による軌道修正”と“7．子どもを受容することに伴う母親の心理的な揺れ”のカテゴリーを内包するカテゴリー・グループは，“心理的な揺れを伴った軌道修正”

TABLE 4 生成された母親の手記のカテゴリー (STEP 3)

カテゴリー・グループ	カテゴリー	カテゴリーの定義
I 子育てにおける疎外感，無力感，徒労感	1．適応できないわが子への不安	問題状況を呈している子どもに対するぼんやりとしたかつ強い不安のこと
	2．母親だけでの問題解決行動	問題状況を解決するために，自分でできるあらゆる努力をすること
	3．専門家の無理解	「気にしすぎ」という専門家の無理解により発達の偏りを早期発見してもらえないこと
	4．義父母や教師，医師からの非難	子どものニーズに合わせた関わり（手助けや保護）を非難されること
	5．疎外感，無力感，徒労感	子どもへの関わりが功を成さずに抱く，疎外感や無力感，徒労感のこと
II 心理的な揺れを伴った軌道修正	6．スクールカウンセラーとの出会いと信頼関係による軌道修正	理解ある援助者との出会いにより，今までの子どもの見方を軌道修正すること
	7．子どもを受容することに伴う母親の心理的な揺れ	子どもを理解し受け入れる際に，抵抗や怒りなど心理的に揺さぶられること
III 援助チームメンバーとしての親役割の充実	8．援助チームの中での信頼関係の広まりと深まり	援助資源が広がっていくことで援助の幅も広がり，信頼関係も深まっていくこと
	9．具体的な方策や情報がもたらす希望	目に見える援助や情報が希望をもたらすこと
IV 子どもや母親自身の将来への展望	10．子どもや母親自身の将来への展望	心の平安を得て自分の人生の目標を見出すこと（子どもの将来の経済的自立への目標と重なる）

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

というグループとしてまとめた。

(3) 援助チームメンバーとしての親役割の充実

“8．援助チームの中での信頼関係の広まりと深まり”“9．具体的な方策や情報がもたらす希望”のカテゴリーを内包するカテゴリー・グループは，“援助チームメンバーとしての親役割の充実”というグループとしてまとめた。

(4) 子どもや母親自身の将来への展望

“10．子どもや母親自身の将来への展望”のカテゴリーを，そのままカテゴリー・グループとした。

4．カテゴリー間の関係（STEP 4）

STEP 4では，TABLE 4“生成された母親の手記のカテゴリー”で示された各カテゴリー間の関係を関係図（FIGURE 1）として表した。この作業は，母親の心理的変容が十分説明されるまで繰り返し修正を加えた。ここで母親の手記に戻り母親の心理的変容に焦点をあて，カテゴリー・グループを中心に，関係図のカテゴリー間の関係を検討する。下線はカテゴリー名である。

(1) 子育てにおける疎外感，無力感，徒労感

A子が1歳半から小学6年生の4月までの時期である。A子は，幼児期から孤立しがちで集団になじめなかった。母親は，“何か他の子どもと行動が違う”と察知し，1．適応できないわが子への不安を抱くようになる。このぼんやりとした不安は，子どもが小学生へと成長し集団参加場面が増えるにつれて大きくなる。母親は心配して教師や医師などの専門家に相談するが，“母親の気にしすぎ”と言われ3．専門家の無理解を実感することとなる。サポートを得られない母親は，2．母親だけでの問題解決行動をとるが，いじめに伴う不登校や学習の遅れは改善されなかった。さらに，母親は4．義父母や教師，医師からの非難を受けた。具体的には，義父母からは“親の態度がすべて悪い”，教師からは“気にしすぎでしょう”，医師からも“自閉的傾向はあるかもしれないが，親の過保護，過干渉であるかと思う”と，母親の養育態度を非難されている。これらは，母親の子育ての自信を失わせ，子どものみならず親としての自分を否定することにつながっている。この時期，母親は，誰からも援助を受けられず，さらに自助努力は実を結ばず死をも考えるほどの5．疎外感，無力感，徒労感を味わうこととなる。この頃は，SCとはまだ出会っていない。

(2) 心理的な揺れを伴った軌道修正

A子が小学6年生4月から小学校卒業までの時期である。A子は，いじめから不登校となった小学校から自分の意志で転校してきたが，1日通っただけで再び不登校となった。5月初旬，それまで校長，生徒指導係担当教諭，担任と相談していた母親は，学校の勧めでSCとの面接を了承した。SCとの出会いは，母親の6．スクールカウンセラーとの出会いと信頼関係による軌道修正を促すこととなる。母親は毎週面接に通い，気持ちが受容されることでSCとの信頼関係を構築していった。ここでいう軌道修正とは，子どもの状況への新しい見方を受け入れ関わり方を変えることである。A子の場合には，A子の状況（作文が苦手，友だちとのコミュニケーションが苦手，表情が乏しいなど）から発達障害の可能性というSCから示唆された新しい見方を受け入れることで関わり方が軌道修正されることであった。しかし，母親に，新しい見方を受け入れることに対す

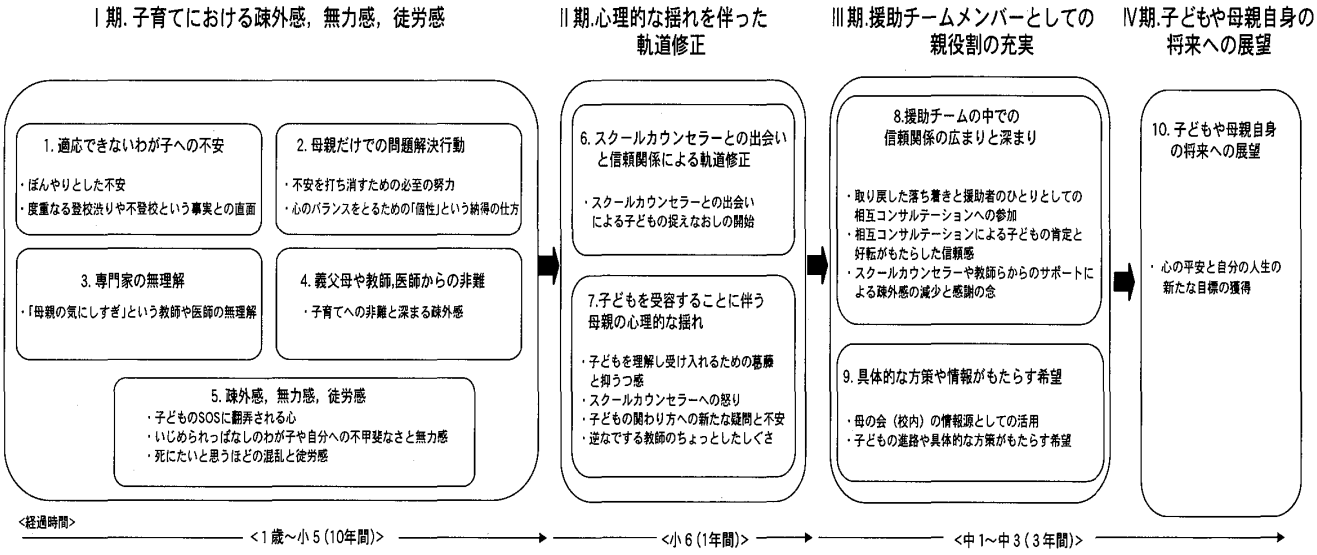

FIGURE 1 母親がクライエントから子どもの援助のパートナーへとなる心理的変容過程（STEP 4）
注1）Ⅰ～Ⅳ：カテゴリーグループ　注2）1.～10.：カテゴリー　注3）・：概念

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

る7．子どもを受容することに伴う母親の心理的な揺れが生じた。それは，自分の子どもの発達障害の可能性を受け入れることに対する葛藤と抑うつ感を生じさせ，SCや教師に対する怒りの感情を引き起こしている。手記にも“混乱しているこちらからはその冷静さに嫌悪する。SCには全く落ち度はない，言いがかりである。誰にもぶつけられない苛だちを八つ当たりしていたのだと今は思う。”とある。この頃，SCは母親面接を毎週設定し，母親の不安に耳を傾け，担任と話し合いをもち，家庭訪問でA子とも関わり，さらに発達関係の相談機関を紹介した。SCの記録によれば，相談機関のWISC－III知能検査の結果は，全検査知能＝93，言語性知能＝92，動作性知能＝96であり，下位検査の群指数として，言語理解＝91，知覚統合＝107，注意記憶＝94，処理速度＝75であった。全体としては年齢相応の知的水準にあった。群指数では，言語面での理解が低いことや状況把握の困難さ，また処理速度の低さが認められた。一方，知覚統合は良好であった。結果については，母親の希望のもと相談機関から母親とSCに渡され，A子の特性についてSCからも説明し母親と共有した。知能検査の結果を受けて，別室登校について，母親や担任，生徒指導係担当教諭と話し合い個別指導が実施されることになった。A子は1学期は不登校であったが，2学期には週1～2回別室登校できるようになり3学期には毎日別室登校をしバス遠足にも参加した。

(3) 援助チームメンバーとしての親役割の充実

A子が中学校1年生から中学3年生の5月までの時期である。この頃，SCは母親面接を毎週設定し，将来の不安や子どもを受け入れることの辛さ等に耳を傾けた。この時点での母親は，子どもを理解し受け入れ初め，心理的な揺れも落ち着きを取り戻していた。そこで，SCは母親に援助チーム会議に参加することを促した。援助チーム会議は，学期に1回と行事前(例えば職業体験，修学旅行等)に定期的に行われた。援助チーム会議を重ねることにより，母親は教師やSCらからのサポートを得て8．援助チームの中での信頼関係の広まりと深まりを実感している。さらに，援助チーム会議で，母親が最も心配していたA子の進路や学習の遅れへの具体的な援助について，母親は教師とほぼ対等に話し合った。つまり母親は援助者のひとりとして，相互コンサルテーションにおけるコンサルタントとしての役割を担った。その結果，教科担当が個別授業で視覚的な教材を活用したり，担任が自主学習ノートにコメントを入れ，A子の学習意欲が持続する工夫を決めた。さらに生徒指導係担当教諭が中心となって，通学制の通信制高校の説明会を開いた。これらの援助は母親にとって，9．具体的な方策や情報がもたらす希望へとつながっていった。さらにSCはA子との面接を設定し，コミュニケーションスキルの練習や小グループでの活動を行った。

(4) 子どもや母親自身の将来への展望

援助チーム会議と母親と子どもの個別面接を継続していった結果，A子が中学2年生の終わりの頃に，母親はすでに心の平安を得ている。母親は，この時期の心境を“私は自分でも驚くほど心は穏やかである。”“‘どうしてできないのか’そればかり思っていた日々を思うと，本当にもったいない。”と，手記に記している。そして，“ただ，高校後の進路がどうなるか，全く不安がないという訳でもない。将来的には経済的な自立という大きな目標がある。そのために，ジョブコーチというものがあるということを視野にいれ，私自身，勉強を進めていきたいと思っている。”と，10．子どもや母親自身の将来への展望をもつに至った。

そして，中学3年生の3学期になると将来の福祉のことも考慮し，母親はようやくA子を連れて医療機関を受診した。その結果，A子はアスペルガー障害と診断された。医療機関から提示された援助案は，援助チーム会議で作成した援助案と意を同じくしており，母親はA子への関わり方にさらに自信を深めていった。

5．母親自身による分析結果への評価 (STEP 5)

分析結果を当事者である母親に提示し，この関係図(FIGURE 1)が母親の心理的変容を表すものとして支持されるかどうかを確認した。母親から“全くこの通りです”とのフィードバックを得て，関係図は，母親が納得できる心理過程を表すものとして確認できた。つまり本研究の結果は，母親から妥当性をある程度支持されたといえる。さらに，STEP 3とSTEP 4についての母親からのフィードバックを紹介する。援助チーム会議という呼称がよかったことや，“私たち援助者は…”とSCが使用した言葉が，“自分が援助者に含まれているという実感がもて，先生も援助してくれるんだという実感が得られた”と述べている。さらに，“SCがコーディネートしてくれて，私のまわりにサポートしてくれる人が集まって…すると，ふらふらしていたのが，なんとかしっかり立てるんです。これがとても大きかった。何をしたらいいかも分かったし，誰が何をしてくれているのかも分かって心強かったです。具体的でないと子どもは変わらないんですよね。”と，教師やSCの活動が母親に伝わったことが確認できた。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

考　　察

本研究で見出された結果をもとに，母親がクライエントから子どもの援助のパートナーへとどのように変容したかについて考察する。最後に，本研究の意義および課題について述べる。

1．母親の心理的変容過程

本研究において，母親がクライエントから子どもの援助のパートナーへと変容する過程が明らかになった。当初クライエントとして，Ⅰ期において，子育てにおける疎外感，無力感，徒労感を抱いていた母親が，Ⅱ期において，心理的な揺れを伴った軌道修正の過程を経てパートナーとなり，Ⅲ期において，援助チームメンバーとしての親役割の充実がはかられ，Ⅳ期において，子どもや母親自身の将来への展望をもつことが示唆された。このように，母親がクライエントから子どもの援助のパートナーへ移行する際には，母親が援助者との信頼関係を支えとしながら，心理的な揺れを経験しつつ子どもを捉えなおし，子どもを理解し受け入れていく過程を経ることが明らかになった。この心理過程について順を追って考察する。

Ⅰ期　子育てにおける疎外感，無力感，徒労感

Ⅰ期は，Ⅱ期以降のSCら援助者と出会う前の時期である。子どもが1歳から小5までの時期であり，母親はどこか他の子どもと違うという不安を抱いていた時期である。その不安が不登校という形で現実のものとなり，母親は教師や医師などの専門家に援助を求めるが，気にしすぎと言われ母親の不安は理解してもらえなかった。さらに義父母や教師，医師から子育てを非難され，母親自身で考えられる解決行動はとってみるものの功を奏さず，母親は死をも考えるほどに苦悩する。中川（2005, p.101）は，障害をもつ親が抱く“自己を喪失したかのような感覚，かつこのような自己の状態を否定的に自覚する”という自己の喪失感について報告している。また石隈（2004, p.339）は，“親は子どもの人生を自分の人生と重ね合わせがちである。親としての苦戦は自分の人生の苦戦であり，親としての自信喪失は人生の危機ともなる”と指摘している。このように母親が抱く自分自身への否定的な感情は，母親の心理的変容の過程を追う上で，キー概念であると思われる。さらに，母親の疎外感，無力感，徒労感を促した外的要因として“専門家の無理解と周囲からの批判”があげられる。子どもが自ら転校を選択したことで新しい援助者との出会いを得て，母親の心理的変容過程はⅡ期の心理的な揺れを伴った軌道修正と移る。

Ⅱ期　心理的な揺れを伴った軌道修正

母親が自分の気持ちをやっと分かってくれる人（SC）と出会ったことで，母親にとって信頼関係に基づく子どもの捉えなおしが開始される。しかし，子どもの捉えなおしの時期は，SCのアセスメントから発達障害の可能性を示唆され，母親の混乱を招いた時期とも言える。母親は子どもを理解し受け入れる過程において，SCへの依存と怒りの感情をもった。これは，Kübler-Ross（1969）の“死の受容”の5段階の怒りの時期にあたる。つまり，Kübler-Rossにおける怒りは，死の病をもつに至った自分の状況に対する怒りであり，母親もA子を授かったことへの夫や他者への怒りを感じ，それをSCに向けたと思われる。しかし，発達障害の可能性に限らず，不登校や非行など問題状況をもつ子どもの母親に，心理的な揺れが生じるのは共通する心情であると言える。それは，子どもが問題状況をもつことで，親は今までの子育てを振り返らざるを得ないからである。母親の心理的な揺れを促した外的要因は，SCによる問題状況の分析と障害の可能性の指摘であった。そして母親はSCのカウンセリングを受けながら，子どもを理解し関わり方を軌道修正しようと試みるのである。したがって，心理的な揺れは軌道修正にとって必要な過程であると考えられる。

Ⅲ期　援助チームメンバーとしての親役割の充実

この時期は，心理的な揺れを経て軌道修正がなされ，母親が落ち着きを取り戻し，援助者のひとりとして援助チーム会議に参加した時期である。援助チーム会議において母親は，援助チームのメンバーとの相互コンサルテーションに関与することにより疎外感が減少し，さらに親として自分が何をしたらいいか，他の援助者が何をしてくれているかという子どもへの具体的な方策が見え，母親は安心感を得ている。石隈・田村・生島（2004）によると，相互コンサルテーションにおいて，保護者は‘その子どもの専門家’として参加することが期待され，さらに，保護者としての願いと誇りが尊重され，保護者としての役割が期待されるとしている。本研究においても，母親はこのような親役割の充実を得たと言える。すなわち援助チームメンバーとしての対等な役割の付与によるコンサルテーションニーズの充足が，親役割への充実を促した要因としてあげられるであろう。

Ⅳ期　子どもや母親自身の将来への展望

援助チーム会議で母親も援助者のひとりとして子どもと関わり，大きな安心感を得てジョブコーチという自分の人生の新たな目標を見出すようになった時期で

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ある。ジョブコーチになるという母親の目標は，子どもの将来の経済的自立への目標と重なる。このように母親が一個人としての目標をもつことは，障害児の母親の意識について研究した中川（2003, p.9）が、障害児の母親が自分の人生や生活をもつことを肯定し，子どものケアを他者と役割分担するという変化が起きると，母親が自己の成長を認識すると報告していることと意を同じくする。すなわち、子どもの問題状況を解決するために母親が援助チームの援助者の一員として参加し，他の援助者と子どもへのケアを役割分担することは，母親の内面の変化をも生じさせ，一個人としての発達も促進されるという側面も示唆している。

2．カウンセリングニーズとコンサルテーションニーズの視点から

本研究で得られた母親の4段階の心理的変容過程を，援助者の立場からカウンセリングニーズとコンサルテーションニーズの視点から考察する。

Ⅰ期　カウンセリングニーズとコンサルテーションニーズの混在

Ⅰ期はⅡ期以降のSCら援助者と出会う前の時期である。母親の心理的変容過程における“Ⅰ子育てにおける疎外感，無力感，徒労感”は，援助者側から言えばカウンセリングニーズとコンサルテーションニーズが混在していた時期と言える。つまり，そこに内包されているカテゴリー“1．適応できないわが子への不安”，“4．義父母や教師，医師からの非難”，“5．疎外感，無力感，徒労感”は，母親自身の子育てへの自信を回復するためのカウンセリングニーズを主に表している。そして，“2．母親だけでの問題解決行動”“3．専門家の無理解”のカテゴリーが内包している概念は，母親が子どもに何をどうしてやったらいいか分からないというコンサルテーションニーズを主に表している。言い換えれば，援助を受ける前の時期は，子どもの問題解決や成長についてのコンサルテーションニーズと，子育てでの自分を振り返り，他者からも責められる苦悩へのカウンセリングニーズが共に大きくあった時期である。母親は10年間，このようなカウンセリングニーズとコンサルテーションニーズを混在してもっていたと言える。

Ⅱ期　カウンセリングニーズを満たしながらのコンサルテーションニーズの対応

母親の心理的変容過程における“Ⅱ心理的な揺れを伴った軌道修正”の時期は，援助者の立場からは，カウンセリングニーズを満たしつつ，コンサルテーションニーズをも充足していった時期と言える。

保護者は，最初はクライエントとして援助を受ける目的で来室することがある。A子の母親がそうであった。ここに，問題状況をもつ子どもの保護者のカウンセリングは何かという問いがある。本研究で援助が開始された時点では，母親にはカウンセリングニーズとコンサルテーションニーズへの充足が求められていた。問題状況をもつ子どもの保護者のカウンセリングニーズは，子どもへの心理教育的援助サービスの必要性から発生しているカウンセリングニーズである。すなわち，保護者（一人の個人）であることのカウンセリングニーズと保護者（援助者）としてのコンサルテーションのニーズが重なっている。つまり，母親の情緒的な葛藤や疲弊などからくるカウンセリングニーズにもある程度応えるが，子どもにどう関わっていったらいいかが分からないというコンサルテーションニーズに応えないと，母親のそれらの情緒的な葛藤や疲弊も解決しない。母親のカウンセリングニーズは，子どもの問題状況が改善しなければ減少しないのである。問題解決を目指すためには，コンサルテーションでの具体的な方策が軌道修正をしていくために必要であることを本研究は示唆している。さらに，本研究では，コンサルテーションニーズを満たす際に，A子の特性を理解する必要があった。不登校や学習の遅れなどのA子のコンサルテーションニーズは，A子がもつ軽度の発達障害の可能性を理解した上でないと適切な援助を行いにくいからである。しかし，母親には，子どもがもつ軽度の発達障害の可能性を受け入れることに対する心理的な揺れが生じた。母親にどのように伝えていくかは専門家にとって重大なテーマである。つまり，子どもを受け入れることに伴う母親の心情の辛さに対するカウンセリングニーズを優先すべきか，今後どのように子どもと関わっていったらよいかというコンサルテーションニーズを優先するか，援助者がそのタイミングをどうはかって，どう伝えるかという重大なテーマがここにも存在する。

Ⅲ期　コンサルテーションニーズを中心とした対応

母親の心理的変容過程における“Ⅲ援助チームメンバーとしての親役割の充実”は，援助者の立場から言えば，カウンセリングニーズがほぼ満たされ落ち着きを取り戻した母親が，援助チーム会議において相互コンサルテーションへ参加した時期である。相互コンサルテーションでは，チームメンバーが対等の関係であることが必要とされる（石隈・田村, 2003）。対等性のためには，保護者が子どもを理解しSCや教師と同じ目線をもつことが必要である。そして，子どもを理解する

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ことを経て，母親はクライエントから援助チームでのパートナーへと変容している。そのためには，II期の過程が必要であり，すなわちカテゴリー・グループの“II心理的な揺れを伴った軌道修正”と“III援助チームメンバーとしての親役割の充実”は，おおまかな母親の心理的変容過程であり，実際の母親の心理的変容過程は，手記の記述からもこの2つの間の行きつ戻りつを体験しながら，安定していったことを本研究は示唆している。

IV期　カウンセリングニーズとコンサルテーションニーズの充足

母親の心理的変容過程における“IV子どもや母親自身の将来への展望”は，援助者の立場から見ると，母親のカウンセリングニーズとコンサルテーションニーズが充足されたことを表している。これは本研究において，母親の心理的変容過程は，カウンセリングニーズとコンサルテーションニーズの混在から充足への過程でもあったことが示唆されたと言える。

3．母親の心理的変容過程が促進された要因

本研究において，母親の心理的変容過程が促進された要因について考察する。

1）援助資源のコーディネーション

II期で行われたSCのコーディネーションにより，担任他校内の教師，相談機関や家庭教師などの援助資源が母親のもとに集まった。石隈ら（2004）によると，援助資源は，クライエントの課題への取り組みや問題状況の解決に援助的な機能をもつ人的資源や物的資源である。それまで一人で子どもに関わり，疎外感，無力感，徒労感を味わっていた母親にとって，援助資源の登場で疎外感が減少したことを指す。さらに，その援助資源から様々な情報が集まったことで，多面的なアセスメントがなされ，援助案が具体的になった。このことが母親の無力感や徒労感を低減することにつながったと考えられる。

2）子どもや母親の自助資源への着目

II期でのSCや教師との関わりやIII期での援助チーム会議でA子の自助資源（例えば，音感が正確で歌が上手）に援助者が着目し子どもを肯定したことが，母親が子どもを受け入れることにつながった。自助資源とは，石隈ら（2004, p.128）によれば，クライエント自身の力，強さで，クライエントの問題解決や自分との折り合いに役立つものである。さらに自助資源という考え方は，個人間差ではなく個人内差に注目しており，クライエントのエネルギー源でもあり具体的な対処能力でもある。母親の自助資源（例えば対人関係が得意）へも着目したことで，母親自身が肯定感をもつことにつながり心理的変容過程が促進したと考えられる。

3）多面的なアセスメントの結果の共有

II期においてはSCと母親，III期においては援助チームを通して，子どもに対する多面的なアセスメントを行い結果を共有した。それによりII期において母親が子ども自身の状況を理解することを促進し，III期以降においては母親自身が自分の役割を明確にすることに役立ち，母親の心理的変容を促したと言える。

4）子どもと学校への折り合いへの着目

III期において援助チームによる多面的なアセスメントをもとに行われたA子への援助は，子どもの生活の場である学校を，子どもの問題や病理の治療ではなく子どもの成長を図る場（近藤, 2002, p.20）と捉えることで，子どもの発達や成長を促進することを目的として行われた。つまり，現実の問題（例：不登校）と，個人と環境あるいはその課題との折り合い（田上, 1999）の問題の解決を目指したと言える。言い換えれば，折り合いという視点は，例えば不登校である子どもを‘問題の子ども’ではなく‘問題状況を抱えている子ども’と捉える視点を示唆する。本事例においても，子どもの問題状況を援助者と一緒に援助していくという姿勢を母親に伝えたことが，母親の心理的変容過程を促進した要因のひとつと考えられるであろう。

5）保護者をエンパワーしたこと

問題状況をもち来談した保護者をエンパワーすることは，様々なアプローチ（家族療法, ブリーフセラピー, 認知療法等）でも強調されている。エンパワーの目的を山本（1986）は，心のケアだけではなく，潜在的な力を最大限に伸ばし発揮できるようにするのが目的であると述べている。さらに，無力の状態から，認知・行動・情動面に変化を生じさせ，生活面に統制力と意味を見出すとしている。本事例においてもSCが関わってからのII期からIV期において，援助者全員が，母親が今行えているところに目を向け，常に母親をエンパワーし続けたことが，心理的変容過程の変容を促進した要因のひとつと言えるであろう。

4．本研究の実践への示唆

本研究は，保護者の手記のデータに基づき“保護者はクライエントからどのように子どもの援助のパートナーへと変容するか”というテーマのモデルを生成することを試みた。研究結果から生成された母親の心理的変容過程のモデル（Figure 1）は，心理教育的援助サービスのあり方への示唆を与えたと言える。具体的には，SCの活動への示唆としては，保護者へのカウンセリ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ングニーズを満たすことだけでは，子どもへの援助サービスのためには十分とは言えないことが示唆された。そして，子どもへの援助サービスの効果を考えながらコンサルテーションニーズを意識し，具体的な方策が見える援助の重要性が示唆された。さらに，保護者がパートナーとなるためには対等性の獲得が必要であり，そのためにはカウンセリングニーズを満たすことが有効であることが確認された。

5．本研究の限界と課題

1）本研究では，M－GTAを用い，文脈を大切にしたデータに密着して，概念およびカテゴリーを生成し，得られた概念およびカテゴリーを解釈しモデルを生成した。本研究は，これらのプロセスを経ることにより，妥当性が高められているといえる。しかし，データに密着しているとはいえ，データを解釈するにあたっては，分析者の感性や判断に委ねられるため，バイアスが避けられないことは限界であると言えよう。

2）本研究では手記をデータとして使用した。手記は，14年間の母親の当事者心理を知る上で貴重である。しかし，分析対象としたデータは，数多くの記述から母親が抜粋して提出したものである。抜粋した利点は，母親にとって意味のあることを伝えていることであるが，同時に母親が援助者には見せたくない箇所は除かれている可能性があることは，本研究における限界である。その限界を超えるために，母親自身のチェック，SCの観察記録，第2筆者の評価を得て分析を試みたが，さらに他の方法も考慮することが課題であろう。

3）本研究は，母親の変容のプロセスに焦点をあてて分析し考察した研究である。促進要因については副次的に考察した。したがって，母親の心理的変容過程にどんな要因が影響を与えたかについては，示唆を得たに過ぎず，今後母親の変容をもたらす要因についての丁寧な研究が必要であろう。さらに，母親自身が考える援助チームのパートナーとしての役割やアイデンティティ等についても，さらなる研究が必要であろう。

4）本研究結果に基づき生成されたのは，クライエントからパートナーとなる母親の心理的変容過程についてのモデル（Figure 1）である。様々な子どもの異なる問題状況を含めた新たな実践にこのモデルが参考とされ，同時にモデルが検証され改善されていくという“循環的な臨床的な研究（下山，1996）”が今後の課題であろう。

引用文献

石隈利紀　1999　学校心理学―教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス―　誠心書房

石隈利紀　2004　学校心理学とその動向―心理教育的援助サービスの実践と理論の体系めざして―　心理学評論，**47**，332-347.

石隈利紀・田村節子　2003　石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門―学校心理学・実践編―　図書文化

石隈利紀・田村節子・生島　浩　2004　心理教育的アプローチ　大塚義孝・岡堂哲雄・東山紘久・下山晴彦（監修）　亀口憲治（編）　臨床心理面接技法3　臨床心理学全書　第10巻　誠信書房　Pp.124-198.

木下康仁　1999　グラウンデッド・セオリー・アプローチ―質的実証研究の再生―　弘文堂

木下康仁　2003　グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い―　弘文堂

木下康仁　2005　分野別実践編　グラウンデッド・セオリー・アプローチ　弘文堂

近藤邦夫　2002　学校と教師への接近―学校臨床心理学への探索―　沢崎俊之・斎藤憲司・中釜洋子・高田　治（編著）　学校臨床そして生きる場への援助　日本評論社　Pp.5-21.

Kübler-Ross, E.　1969　*On death and dying*.　New York : Simon & Schuster/Touchstone.（川口正吉（訳）　1971　死ぬ瞬間―死にゆく人々との対話―　読売新聞社）

中釜洋子　2002　家族臨床を学ぶ過程で考えたこと―そこから学校臨床への発信を試みる―沢崎俊之・斎藤憲司・中釜洋子・高田　治（編著）　学校臨床そして生きる場への援助　日本評論社　Pp.61-85

中川　薫　2003　重症心身障害児の母親の「母親意識」の形成と変容のプロセスに関する研究―社会的相互作用がもたらす影響に着目して―　保健医療社会学論集**14**，1-12.

中川　薫　2005　「子と自分のバランスをとる」―重症心身障害児の母親の意識変容の契機とメカニズム―　保健医療社会学論集**15**，94-103.

大河原美以　2004　家族へのコンサルテーションへの技法　学会連合資格「学校心理士」認定運営機構企画・監修　石隈利紀・玉瀬耕治・緒方明子・永松裕希（編）　学校心理士による心理教育的援助サービス　北大路書房　Pp.101-113.

下山晴彦　1996　心理学における実践型研究の意義

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

—臨床心理学研究法の可能性をめぐって— 心理学評論, **39**, 315-337.

Strauss, A. L., & Corbin, J. 1990 *Basics of qualitative research : Grounded theory procedures and techniques*. London : Sage. (ストラウス A. L.,・コービン J. 南 裕子(監訳) 1999 質的研究の基礎：グラウンデッド・セオリーの技法と手順 医学書院)

田上不二夫 1999 実践スクール・カウンセリング—学級担任ができる不登校児童・生徒への援助— 金子書房

田村節子 2003 スクールカウンセラーによるコア援助チームの実践—学校心理学の枠組みから— 教育心理学年報, **42**, 168-181. (Tamura, S. 2003 Core support team practice by a school counselor in a school psychology. *Annual Report of Educational Psychology in Japan*, **42**, 168-181.)

田村節子・石隈利紀 2003 教師・保護者・スクールカウンセラーによるコア援助チームの形成と展開—援助者としての保護者に焦点をあてて— 教育心理学研究, **51**, 328-338. (Tamura. S., & Ishikuma, T. 2003 Forming a core team (teacher, school counselor, and parent) to support a student : Parents as supporters. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **51**, 328-338.)

渡辺久子 2000 母子臨床と世代間伝達 金剛出版

山本和郎 1986 コミュニティ心理学 地域臨床の理論と実践 東京大学出版

八並光俊 2006 応用実践期におけるチーム援助研究の動向と課題—チーム援助の社会的ニーズと生徒指導との関連から— 教育心理学年報, **45**, 125-133. (Yatsunami, M. 2006 Reviews of research trends in educational psychology in Japan during the past year : School psychology. *Annual Report of Educational Psychology in Japan*, **45**, 125-133.)

吉川 悟 1999 学校とかかわるためのシステム論—システムとの関係形成としてのジョイニング— 吉川 悟(編) システム論から見た学校臨床 金剛出版 Pp.28-46.

謝　辞

本研究は，第1筆者が援助させていただいたA子さんに関してのお母さんの手記を分析し，第2筆者とまとめたものです。「他の苦しんでいる方々のために役立ててほしい」と，公表することを心よく許可してくださったA子さんのお母さんに心より感謝申し上げます。

(2006.5.12 受稿, '07.1.27 受理)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

How Does a Mother in a Student Support Team Change From Being a Client to Being a Partner in Helping Her Child ? Qualitative Research on a Mother's Notes

Setsuko Tamura (Ibaraki Christian University) and Toshinori Ishikuma (Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba) *Japanese Journal of Educational Psychology, 2007, 55, 438—450*

The purpose of the present research was to develop a psychological model of how mothers of children with problems change from being clients in counseling into being partners in the student support teams for their children. Using the Modified Grounded Theory approach, the notes that a mother gave a school counselor were analyzed. In those notes, the mother recorded in sequence the situations that her child had faced since birth, as well as her feelings and thoughts about her child and herself, about the sessions with the school counselor, and about how she had changed her way of thinking. From the analysis of those notes, 20 concepts were extracted and organized into 10 categories, which were further summarized in 4 higher-level categories. We were able to identify 4 periods : (1) a sense of alienation, (2) freedom from negative thoughts as a result of being the client of a school counselor, (3) fulfillment of the parent's role as a partner in the counseling, and (4) obtaining an overview of the future for herself and her child.

Key Words : student support teams, counseling, consultation, school psychology, parents

NII-Electronic Library Service